

# 農士 剛門

剛門 士門 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）など。会員制メールマガジン「アグロマネーニュース」も発行している。

分などのことである。これらを統計資料などで検証してみよう。

## 農水省の楽観論は根拠のない願望

本誌が読者の手元に届くのは3月下旬。国内最大の食料基地・北海道では、春の農作業シーズンに備えての準備が始まる頃だ。今春は例年と違って、雪解けを待ちながら、肥料が足りない、肥料が届いても代替品だった、あるいは成分が少ない、そんな不満が農業現場から聞こえてくるだろう。

今月号も北海道・春肥問題に全力投球する。問題を整理しておく。ポイントは3点ある。①春肥の供給量について、モロッコからの緊急輸入分が間に合うのか。②農家への配達が農作業のタイムミングまでに届けられるのか。③供給した肥料の品質問題。代替品や成

で春肥の7割は昨年内に農家へ配送されている」

実態とは逆の説明に驚いた。そこで2月中旬、農水省としての見解を質すべく、本問題の司令塔、農産局・安岡澄人審議官により詳しい説明を求めてみた。

「国全体でみてリン安などの春肥の原料については、例年に近い供給量は確保できるとみています。安心はしていませんが、ホクレンもしっかり供給していただけると考えています」

残念ながら、安岡審議官の説明は、統計など具体的根拠にもとづいたものではなく、期待願望を述べたものと思えない。逐条的に検証してみよう。

省幹部の説明で引っかかったのは、「原料は前もって手当てが進んでいた」という部分。マーケットの事実認識とは大きく違うし、貿易統計を確認すれば、そのような認識には至らないはずだ。安岡審議官に、単刀直入に質問した。

「その認識は、ホクレンなどへのヒヤリングだけで得たものか、あ

るいは原料確保について裏付け資料を確認した結果のものか」

当然、裏付け資料を示してくると予想していたら、「ホクレンとは適宜情報交換をしています」という回答が戻ってきた。これには正直、驚いた。手元の政府統計を調べるだけでも事態を正確に把握できるはずだ。

肥料取締法は、原料の輸入について帳簿に記載、帳簿の備え付けを義務づけ、帳簿の検査、関係者への質問を認めている。国内最大の食料基地で、春肥が不足という異常事態に直面する懸念が生じていたわけだから、同法に沿って事実の確認は可能だった。安岡審議官は、「適宜情報交換」と説明するが、その後の状況から判断すると、ホクレンの期待願望のような説明を鵜呑みにしてただけで、事態を正確に把握しようという態度ではなかったようだ。

春肥向け原料の手当てでホクレンが遅れをとったことは、全国複合肥料工業会（全複工）の統計から十分に推測できる。肥料界には、全農やホクレン向け系統メーカーと、商人系と呼ぶ商系メーカーがある。

肥料の価格高騰が取り沙汰され

## 続報

# 事態切迫！原料は間に合うのか 北海道が春肥不足に陥る可能性

# 土門 辛聞

「令和3肥料年度の輸入原料価格については、直近の為替状況を反映すると

始めた昨年5月の生産実績をご覧いただきたい(表1)。価格高騰に対する危機意識がともやシャープに出ている。原料手当てで系統が商系に遅れをとっていたという図式が読み取れる。

とりあえず数量差をみていただきたい。商系メーカーの健闘が目立つ。安岡審議官によると、末端販売シェアは「全国推計で系統の割合が7〜8割程度」だ。それを考慮すると、商系メーカーの方が、その時点で原料は先高と踏んで増産していたと理解できるからだ。商系肥料メーカー関係者は、次のように補足してくれた。

「元売商社や問屋も、肥料の先高を読んで不需要期にもかかわらず生産出荷を急がせて備えました」

ホクレンに、その気構えがあったか。その判断につながるとも重要な資料がある。商系メーカーが肥料の先高に備えていた頃、道内農協向けに配布した5月31日付け「令和3肥料年度 肥料価格について」と題した文書だ。

「令和3肥料年度の輸入原料価格については、直近の為替状況を反映すると

もに、尿素やリン安、加里等主要輸入原料の今後の値下がり要因を最大限反映し設定しました」

驚くべきことはホクレンが、その時点でマーケットの見方とは逆に肥料価格を先安と読んでいたことだ。そのタイミングで、そのような内容の文書を農協に配布する組織が、「前もって手当て」を進めていたと思えるだろうか。聞くも愚かなことだ。安岡審議官が、その文書の内容について省幹部に説明していたのか。本人から聞きそびれてしまった。

## 暦年ベースと肥料年度のトリック

次いで省幹部の口から出た「統計もそのような結果が出ている」という説明を分析してみよう。とつさに思い浮かんだのは、その省幹部は、部下が貿易統計の数字を都合よく切り取った資料を示されたものを鵜呑みにしていたのではないかと疑問だ。肥料年度ではなく、暦年ベースで整理したものを参考にした見解ということだ。そこで貿易統計から2通りの資料を作成してみた(表2)。

最初に断わっておきたいことがある。通常の肥料年度を1カ月前

■表1：高度化成の系統・商系別出荷実績 (単位：t)

出典：全複工統計

|       | 4月     |        |        | 5月     |        |        | 6月     |        |       | 4~6月    |        |        |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|---------|--------|--------|
|       | 計      | 系統     | 商系     | 計      | 系統     | 商系     | 計      | 系統     | 商系    | 計       | 系統     | 商系     |
| 2020年 | 50,774 | 31,259 | 19,515 | 32,012 | 23,746 | 8,266  | 34,462 | 25,003 | 9,459 | 117,248 | 80,008 | 37,240 |
| 2021年 | 57,085 | 34,603 | 22,482 | 60,476 | 38,290 | 22,186 | 34,537 | 24,983 | 9,554 | 152,098 | 97,876 | 54,222 |
| 数量差   | 6,311  | 3,344  | 2,967  | 28,464 | 14,544 | 13,920 | 75     | -20    | 95    | 34,850  | 17,868 | 16,982 |
| 前年比%  | 112.4  | 110.7  | 115.2  | 188.9  | 161.2  | 268.4  | 100.2  | 99.9   | 101.0 | 129.7   | 122.3  | 145.6  |

■表2：リン安 暦年／肥料年度ベースでの主要国からの輸入量 (単位：t)

出典：財務省貿易統計

| 年度    | 1月     | 2月     | 3月     | 4月     | 5月     | 6月     | 7月     | 8月     | 9月     | 10月    | 11月    | 12月     | 計       |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|
| 2019  | 45,275 | 56,769 | 35,414 | 42,880 | 49,172 | 59,481 | 59,305 | 25,905 | 30,052 | 62,502 | 18,765 | 39,445  | 524,965 |
| 2020  | 27,751 | 68,631 | 30,429 | 57,818 | 52,101 | 28,045 | 20,137 | 41,001 | 28,341 | 67,224 | 18,746 | 28,454  | 468,678 |
| 2021  | 29,268 | 66,264 | 32,743 | 64,231 | 31,589 | 62,518 | 37,355 | 34,117 | 40,575 | 74,224 | 23,692 | 6,121   | 502,697 |
| 21/20 | 1,517  | -2,367 | 2,314  | 6,413  | -2,051 | 34,473 | 17,218 | -6,884 | 12,234 | 7,000  | 4,946  | -22,333 | 34,619  |

肥料年度(6月~5月)

|      | 6月     | 7月     | 8月     | 9月     | 10月    | 11月    | 12月    | 1月     | 2月     | 3月     | 4月     | 5月     | 計       |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|
| 2018 |        |        |        |        |        |        |        | 45,275 | 56,769 | 35,414 | 42,880 | 49,172 |         |
| 2019 | 59,481 | 59,305 | 25,905 | 30,052 | 62,502 | 18,765 | 39,445 | 27,751 | 68,631 | 30,429 | 57,818 | 52,101 | 492,740 |
| 2020 | 28,045 | 20,137 | 41,001 | 28,341 | 67,224 | 18,746 | 28,454 | 29,268 | 66,264 | 32,743 | 64,231 | 31,589 | 456,043 |
| 2021 | 62,518 | 37,355 | 34,117 | 40,575 | 74,224 | 23,692 | 6,121  | 42,144 |        |        |        |        |         |

1月までだ。従っ

本稿で整理した21肥料年度での輸入量を追うと、見方は一変する。何よりも昨年10月15日発令の中国政府による輸出規制の影響が、12月からもろに出ていることが分かる。

本稿執筆時点で確認できる貿易統計の数字は、22年1月までだ。従っ

倒して21年6月から翌年5月とした。先に説明したように、春頃から先高感が業界に浸透し、それ

に対応して各メーカーによる原料の早期手当てを統計に反映させるためだ。対象は中国を含む主要国からの輸入分(全体の9割以上)。

データをみると確かに暦年ベースなら、21年は「例年に近い供給量」どころか、前年を上回っていることが分かる。省幹部の楽観論は、暦年ベースでの統計を示されたことによるものと思えない。

て、22年2月以降、よほど輸入の上積みがなければ、「例年に近い」という状況には達しない。19・20肥料年度の平均輸入実績（47・2万t）を21肥料年度の予想需要量と想定。そこから1月までの輸入実績分を差し引いたものを必要輸入量とした。すると不足分は15・1万tということになる。それを踏まえて安岡審議官に調達状況を質してみた。

「心配することはありません。モロッコだけでなく、各地から入ってきますよ。ヨルダン、韓国、米国、中国からも入ってきますよ」

輸入国の名前をズラツと並べたが、肝心の量についての説明は一切なかった。3月1日公表の貿易統計では22年1月分は4・2万t。輸入先は、ほぼ中国から。昨年10月15日に中国が輸出規制に踏み切る前の既契約分だ。多くは名古屋、姫路、宇部などで輸入通関。その税関の所在地から、有力商系肥料メーカーの輸入が大半を占めると推測される。

それにしても、5月までに不足分15・1万tの原料手当てができるかどうか。入手した情報を積み上げてみる。まず大口のモロッコからの緊急輸入は、合計10万tに

なると推測できる。根拠は、2月17日付け日本農業新聞が報じた「全農 春肥原料を確保」に、全農がモロッコから調達した分を「約8万t」と認めたこと。ホクレン分は、この中に含まれる。

前月号でも指摘したように、モロッコからの緊急輸入は、3隻の船で運び、第1・2船は、住友商事との共積みだ。3隻トータルの船腹量は10・7万t。全農分を差し引くと、住商分は2万t程度。計算は合う。第3船には、全農調達のリン鉱石も混載という情報もあったが、確認はとれなかった。

モロッコに次ぐ大口は、三菱商事のヨルダンだ。ここはマックスで船2隻分4万t程度の調達量だが、春肥に間に合うかどうか。間に合っても2万t程度で、北海道の不足分に充てられるかどうかは不明。韓国、米国、中国などはいずれも小口。すべて引っくり返しても1万t台。

結局、不足分15・1万tのうち、確定はモロッコからの10万tに、ほぼ中国からの4・2万tだが、ここで重要なのは、そのすべてが春肥向け原料に回るかどうか不明なこと。先高を見越した商系分の在庫となる可能性が大きい。

## 原料調達は雪解けに間に合うか

次なる問題は供給のタイミング。北海道での春肥製造の命運を握るのは、モロッコからの緊急輸入にかかっている。前月号でもお伝えしたように、モロッコでリン安の積み出し港だったジョルフ・ラスファール港を日本時間で1月に相次いで出港した3隻の船が、すべてスケジュール通りに道内の港に着き、道内の工場へ運ばれて製造され、道内の農家が春肥を撒くタイミングまでに配達されるかという問題である。

結論は、タイトロップ。すべて網渡りということだ。あらためて3隻の船の動きを整理しておいた（表3）。

第1船 QUEEN ISLAND 号は、船舶位置情報によると、1月1日に現地を出港して、2月7日に広島・江田島港にある全農グリーンリソースの専用バースに着岸した。その後、福岡・小倉港、茨城・鹿島港、岩手・宮古港に途中寄港しながら、北海道・釧路港に着くのが3月4日早朝。まさに原料運搬の巡航船のようだ。釧路港では、入港してからバ

スに着岸するのに、予定では4日もかかる。輸入商品なので、税関による積荷の検査などがあるのだろうか。それから荷揚げ作業にか

現地はモロッコ JORF LASFER 港、国内港への所要日数は12日程度。日本標準時。第3船の積荷にはリン安以外にリン鉱石もあるらしい。

■表3：モロッコ肥料原料輸送大作戦

|     | 船名           | 船種<br>載貨重量   | 現地<br>出港日 | 国内<br>入港日 | 最初の<br>到着港 | 道内の<br>到着港 |
|-----|--------------|--------------|-----------|-----------|------------|------------|
| 第1船 | QUEEN ISLAND | 貨物船 37,802t  | 1月1日      | 2月7日      | 江田島        | 釧路         |
| 第2船 | KING ISLAND  | 貨物船 33,152t  | 1月25日     | 3月2日      | 小倉         | 不明         |
| 第3船 | SEAMASTER    | バルク船 36,500t | 1月30日     | 3月11日     | 小倉         | 不明         |

処理能力なら5日間。倍の処理能力なら2日かから3日間ですむ。思いのほか荷揚げに時間がかかることが想定される。

北海道・春肥問題の命運を握るのは、第2船 KING ISLAND 号だ。本稿執筆時点（3月1日）の船舶位置情報によると、当初、小倉港に着く予定だったのが、韓国・光陽港沖合に停泊、その翌日には門司港

着に変更となり、最終的に小倉港となった。小倉港で積荷の一部を下ろし、そのまま北海道に向かうのか、現時点で情報は何もない。北海道へストレートに向かう最

短ルートで作業スケジュールを予想してみよう。小倉港で1万tの積み下ろしとしたら、入管検査も含めて同港での停泊日数は、最低でも5日。その翌日に出港すれば道内港への到着に4日を要する。3月10日頃になるか。さらなる積み下ろしで途中寄港があれば、その分、到着は遅れる。

道内入港時点での積載量は不明だが、かりにホクレンと商社分で2万tとすると、すべての原料を荷揚げするのに、降雪や降雨がないという条件で一日2000tの処理態勢で10日はかかる。

さらに港から工場への運搬も厄介な問題だ。1日に2000t荷揚げして工場に配送するには、20t積みダンパーで1000台は必要。そのダンパーの手配ができるかどうか。ホクレンには、子会社の

配送のことだ。1000台もの規模になれば、道内からダンパーをかき集めなければならぬ。その頃ダンパーは、排雪で道内で引っ張りだこのはずだ。

ホクレン肥料の道内工場に原料が持ち込まれ、製造態勢が整うのは、早くも3月中旬。農家の庭先へ配送となると、さらに時間がかかり、春の雪解けのタイミンぐとぶつかる。雪解けが早まれば、それに合わせて農作業の段取りは早まり、肥料も早めに準備しなければならぬ。

省幹部は「春肥の7割は昨年内に農家へ配送」と説明した。この数字が合っているかどうかは別として6割程度は、その通りのようだ。早めに配送されるのは、輸送が困難となる日本海側の積雪地帯で、稲作が多い。従って、春肥不足が生じるのは、降雪が少なく肥料成分でもリン安を多用する十勝など国内最大の畑作地帯。その十勝の雪解けは、3月になって気温が上昇したことから、例内より早いという見方が強まっている。

## 疑似固結でクレーム殺到か

かりにモロッコから緊急輸入し

た原料で不足分をカバーできて、春作業に間に合うように製品を農家に届けることができて、それ以上に厄介な問題が待ち構えている。品質の問題だ。

それを認めるホクレンの内部文書がある。前月号でも取り上げたが、道内JAへの「令3肥1月以降の出荷対応」と題した通知文書だ。その最後の方で品質問題のことに触れて、次のように記述している。

「今回は緊急で新規ソースから導入した原料を使用することから、一部の銘柄においては疑似固結が懸念されますが、代替品が無く交換対応ができないことから崩して使用願います」

新規ソースとは、モロッコ産リン安の輸入ルートのことである。疑似固結とは、「固結に似たような現象」のことで、もともと水分が多いモロッコ産リン安を使った場合に起きる現象。メーカーは、製造時や包装時の段階で脱気の強弱を調整して固結しないように配慮している。

その一方で、脱気の調整をつけにくいバルク・ブレンドの肥料を使う機械施肥のケースでは、「固結防止剤の安定供給にも配慮」(サ

ンアグロ「まんさく通信」14年4月号)という態勢をとっている。これがマーケティングの基本だ。

あらためてホクレン内部文書をお読みいただきたい。最初から不良品と認めて製品を販売しようとしている。ノークレーム・ノーリターン、やらずぶったくり商法そのものではないか。安岡審議官に、その旨、通知文書の該当部分を読み上げて指摘すると、思わぬ回答が戻ってきた。

「あるものを(畑に)入れてもらいます」

これには愕然とした。農水省自らが欠陥商品にお墨付きを与えたようなものではないか。先にも指摘したように、すべて何の根拠も示さずに期待願望だけで肥料行政を仕切ってきたツケがこうした形で出てくるのだ。

すぐく気になることがある。道内JAは、通知文書の当該部分を組合員に説明していないことだ。パニックは確実に起きる。当事者ホクレンだけでなく、チェックする立場にありながら、深刻な事態に目を背け続ける砂漠のダチョウと化した農水省・肥料行政に厳しい批判の目が向けられることは確実だ。

# 土門 辛聞

ホクレン運輸がある。どちらかといえば液体物の輸送に強い。生乳や乳製品の